

## 『私には何も出来ない』

春 号のエッセイですが、この原稿は2月極寒の時期に書いていますので、寒い時期のお話になることを、どうぞご容赦ください。

こ 十数年来、新宿の仕事場に小田急で通勤しています。小田急は新宿駅西口に位置します。職場は東口方面の明治通りにあるので、西口から東口へ向かいます。新宿駅の東西連絡通路が新しく出来る前は、地下鉄丸ノ内線改札口横にある連絡通路が一本駅構内にあるだけでした。西口を外に出れば、大ガードの手前にある「思い出横丁」の脇から入る半地下通路が大ガードを潜って東口方面に行けますが、夏の暑さや冬の寒さ、最短距離を考えれば、やはり駅構内にある連絡通路が一番便利で、毎日そこを通っていました。温がグンと下がった師走の頃から、連絡通路入口の一面に、一人の男性が佇むようになりました。着古した外套などを重ね着して着ぶくれ、大きな紙袋などを持っているホームレスの方でした。彼は通り過ぎる人達を見ることもなく、ただ無表情に俯いて、毎日同じ場所に立っていました。日中のことは分かりませんが、帰りも同じ場所にいました。きつと大晦日お正月も駅構内が開いている間は、ずっとそこにいたと想像します。正月休みが終わって私が又通勤し始めると、彼は前年のままの姿で、その場所に佇んでいましたが、寒さが厳しくなり一層疲れた様子でした。寒いだけで、大きく体力を使うものですか。寒い夜をどのように凌いだのか、私には想像も付きませんが、兎に角、その年の冬を彼は乗り切りました。私には、何も出来なかったのです。心の中は済まない気持ちで一杯でした。彼を見てから二度目の冬、やはり着ぶくれして去年と同じ場所に立っていました。今年も又、厳しい寒さの中をここで過ごすのだろうか。この厳しい寒さを命をかけて過ごすのだと思うだけで、

私には何も出来ないのです。2月の或る日、何時もいるはずの彼の姿が見えません。何処か暖かな所に居場所が見つかったのだろうかと思うことになりました。その何日か後、テレビで低体温症で亡くなった人のニュースを見ました。それは女性の方で行き倒れだったようです。明らかに新宿地下道にいた彼とは別人です。もしかしら、彼も低体温症で亡くなったのではないかという思いが胸を過ぎりました。彼を見かけなくなった前日あたり、何時も立っている彼が床に座り込んでいた姿が、思い起こされました。

私 には、東京の寒さの中で行き倒れて死んだ友がいます。それは短くても数十分、長いときには一時間近くということも、ざらにありました。私が教員現役の時で青森にいた時です。彼は東京の実家で暮らしていたので長距離電話。当時は固定電話。電話料は相当かかったと思います。彼は精神を病んで入院していました。数ヶ月、彼からの電話がなかったので、元気になったのだろうかと思っていました。たまには私からも電話してみようと思いましたが、彼のお兄さんのお嫁さんが電話口に出られ、彼が死んだことを聞いたのです。死因は低体温症。入院先を抜け出し、夜中極寒のなか街を彷徨い冬の早朝に行き倒れて発見されたのです。私は、その大事な友に何もしてやれなかったことに深く悔いました。

夏 になつて、彼の死を知らせてくれた義理のお姉さんから小包が送られてきました。包装を解くと中から硝子の花瓶が出てきました。添えられた手紙には、こう書かれていました。「義弟は、きつとあなたにプレゼントしようと思つて買つてあったのでしよう。花瓶の箱には熨斗紙がかかっていて小さくあなたの名前が書いてあります。どうぞ、お受け取り下さい」その花瓶を握りしめ、私は滂沱と涙を流しました。

友にも何も出来なかった自分が、今更ながら悔やまれるのです。